

## 戦争中の生活

下鳥 文雄（昭和 11 年生まれ）

私は昭和 17 年 4 月、国民学校（今の小学校）に入学しました。前年の 12 月 8 日、日本軍はハワイの真珠湾米軍基地を空襲し、太平洋戦争が始まりました。学校生活も戦争の影響を強く受けていたと思います。

朝礼の校長先生のお話は、日本軍がアメリカ軍やイギリス軍に勝ったという話を中心でした。

やがて、日本軍の戦況が悪くなってくると、食料が配給になりました。お米はキップを持っていかないと買えませんでした。足りない分は近在の農家などに買い出しに行って手に入れました。祖母や母のタンスの中の着物はどんどんお米と交換されていきました。お金の値打ちがなくなり、物々交換でなければ食物を手に入れることは難しくなっていました。

豆腐は貴重なタンパク源で、売り切れないうちにと朝暗いうちから買いに行きました。長い行列ができていました。こたつで納豆を作るので、こたつ布団をめくると納豆のにおいがしました。白いご飯を腹一杯食べられたらなあというのが、その頃の最大の願望でした。ご飯の量を増やすために、大豆や大根を入れたり、代用食と称してさつま芋や南瓜で腹を満たしていました。校庭の周辺も南瓜畑となりました。

叔父さんたちが軍隊に召集されていきました。近所の大学生のお兄さんも学徒動員で召集され、南洋諸島で戦死されました。私たちは、幼年学校や予科練に行きたいとよく友だちと将来の希望を話し合いました。

学校では、軍人勅諭や教育勅諭を暗記してくるように言われ、毎朝一人ずつ点検確認が行われました。手旗信号も赤白の小旗を作って練習しました。今でもかなり覚えています。また、紅白の玉入れの玉に砂を入れて、それを焼夷弾にみたてて投げる練習もしました。

青竹を背の高さくらいに切ったものを銃剣の代わりにして、敵陣攻撃の練習や行進、整列、ささげ筒の演習も毎日のように行われました。

天気のよい日には朝礼はグラウンドで行われ、皇居のある東の方を向いて最敬礼をしました。号令をかける先生は、将校のようにサーベルを斜め上方に上げて指揮をとりました。

裏の畑に穴を掘り、壘をのせ土をかぶせて地下壕を作り、空襲の折には避難しました。湿っぽかったのを覚えています。

授業中にサイレンが鳴ると、警戒警報発令ということで、全員耳を指でふさいで机の下にもぐりました。実際に B 29 が襲来したときは、六年生を先頭にかけて足で集団下校しました。北の空に悠々と飛んでいく B 29 の下の方で、白い煙がいくつも見えました。高射砲を打っているとのことでしたが届かないようでした。

疎開児童がやすねに泊まって通学していましたが、夜になると泣き出す子もいるとのことでした。そんな噂話をしながら友だちと歩いていると、それを聞きつけた年寄りが疎開児の悪口を言うなど厳しく叱りつけてきたことを覚えています。その頃はこわい大人がいて、悪いことをする

とよく叱られたものです。

お昼には日の丸弁当と称して梅干一つの弁当が奨励しょうれいされました。「天皇陛下から頂いた味噌」と、各自持参のお椀わんに味噌が配られお湯を注いでもらって頂きました。

長靴が抽せんで当たりましたが数日で水がしみこんできました。わら靴をはいて通学しました。室内でははだしかぞうりばきで、あかぎれやしもやけの子が多くいました。

5年生になると、剣道が習えるというのが楽しみでした。体育館で練習している5年生を戸の隙すき間からのぞいてうらやましく思っていました。放課後になると木の枝などで、チャンバラごっこをよくやって遊びました。

8月に入って、夜、東の空が赤いと近所の人たちが騒いでいました。直江津より遠い、柿崎かという人はいましたが長岡という人はいませんでした。それほど近くに見えたのです。

やがて、広島長崎に原爆が落とされたのですが、大型爆弾という以外詳しくは知らされませんでした。ですから、8月15日に天皇陛下のお言葉をラジオ放送で聞いても、よく聞きとれないこともあり、日本が敗れたと聞かされても信じられませんでした。しばらくして、今夜からは電灯に黒布をかけなくてよくなることにほっとしたような気持ちになったことを思い出します。